

GIBSON IS GIBSON

by Takashi Kawamata

OVER THE CENTURY

Gibson (ギブソン)——エレクトリック・ギター、アコースティック・ギター、マンドリン、バンジョーなどの弦楽器に多少なりとも興味を持つ者は、このブランド・ホームを知らないはずがない。なぜならば、ギブソンは、それらの弦楽器のマニアックチャーとして、永い間トップ・ブランドの座を保持し続けているからだ。

会社創立は1894年。約100年間にわたる社史をひとくくれば、それは弦楽器というフィルターを通して語られるビジュアル音楽史に通じるものとなる。つまり、ギブソンは、その長い歴史の中で、これらの弦楽器の開発・生産において多くのエポックを残し、それが音楽シーンの動きに多大な影響を与える結果を生んでいるからだ。

そもそも弱音器と言えアコースティックの弦楽器にとって、いかにしてグリアーで大きなボリュームのサウンドを得るかということは、その楽器の基本的な性能を左右する大きな問題であった。従って、ミュージシャンたちのニーズもその点に集中していた。

現に1940年代、エレクトリック・ギターを実用化するまでのギブソンも、ミュージシャンたちの切実な要求を満足させるためにこの点を基本的なテーマとして

研究を重ね、新開発の革新的なノウハウを駆使したマスタートーン・バンジョーやFホール・アーナドトップ・ギター、ジャンボ・ボディ・フラットトップ・ギターなどの生産で、すでに技術力、信頼性、サウンドなどすべての面で他の追随を許さない、押しも押されぬトップ・マニファクチャーとして業界をリードする存在となっていた。しかも、ギブソンのこういった努力によって、これらの楽器の演奏スタイルが徐々に変わっていったことも事実なのである。

ちなみに、このビッグ・ボリウム、クリアー・サウンドの究極のテクニックとして生まれてきたのがエレクトリック・ギターの概念と言えるが、その開発や実用化に際しても、100年近くにもなるしっかりとしたアコースティック楽器製造技術の蓄積を持つギブソンは、他のメーカーの追随を許さないユニークな発想と芸術的とも言える木工技術によって、数多くの名器を世に送り出すことになる。

CLASSICAL INNOVATIONS

ギブソンは、1936年にすでにES-150 (チャーリー・クリスチャン・モデル) というエレクトリック・アコースティック・ギターを発表していたが、一人の天才ギタリストとギブソンの優秀な開発スタッフとのコラボレーションによって1952年に世に送り出された「レス・ポール・モデル」は、それ以降のエレクトリック・ギターの開発に多くの啓示を与えるものであった。

たとえば、ラミネートされたソリッド・ボディ、各弦ごとに微調整可能なピックアップとそれをコントロールするアッセンブリの形態、ゴールドメタリックという意表をつくフィニッシュ・カラー、それにトップ・ギタリストとの対話によってアイデアや実用性を高めていくという開発手法などである。

そして、このギターの成功によりエレクトリック・ギター開発の基盤を確立したギブソンの開発スタッフは、より先進的なノウハウとギターの開発へと前進していくのだが、その成果には目覚ましいものがあった。

正確なピッチとテンションのコントロールを可能にしたチューン-0-マチック・ブリッジ・システム ('54年)や、大出力を持ちながら雑音をカットすることが出来るハムバッキング・ピックアップ ('57年)の開発、プレイヤビリティを追求したシンライン・セミアコースティック・ボディのES-335の発売 ('58年)、変形ボディの先駆的作品となったフライングV、エクスプローラー、モダンのコリナー・ギター3部作の発表 ('57-58年)、エレクトリック・ギターを木工芸術品のレベルまで到達させたサンバースト・レス・ポール・スタンダードの発売 ('58年)、ステージ・アクションの制約をなくす軽

量コンパクト・ソリッド・ギターのハンリといえるSGシェイプ・ボディの開発 ('61年)、量産された初のスルーネック・ボディ・ギターとなったファイアーバード・シリーズ・ギターの発売 ('63年)など、'50年代から'60年代初期にかけては次々と新しい衝撃をギタリストたちに与え続けたのである。

こうしてギブソンは、すべてのギタリストから絶対的な信頼を寄せられるようになり、フル・アコースティックからセミ・アコースティック、ソリッド・ボディに至るまで、あらゆるタイプのエレクトリック・ギターを供給できる大メーカーとして業界に君臨する立場を手中に収めることになった。

PRESTIGE IN ROCK

一方、1950年代初頭、ちょうどエレクトリック・ギターが実用化された直後に生まれてきたロックン・ロール・ミュージックでは、エレクトリック・ギターが不可欠な要素となっていた。つまり、ある意味では、エレクトリック・ギターの出現によってロックン・ロール・ミュージックの演奏スタイルが生まれてきたとも言えるのである。

なぜなら、白人系のカントリーやヒルビリー・ミュージック、黒人系のブルース、リズム&ブルースなど、ギターを中心としたコンボ・バンドによって演奏さ

れるタイプの音楽をミックスして、より先鋭的なサウンドに発展させたこのスタイルには、ギター・プレイのニュアンスがアンプによって増幅され確実に表現できるエレクトリック・ギターは、まったく理想的な存在であったからである。

ビル・ヘイリー&ヒズ・コメッツ、エルビス・プレスリー、チャック・ベリーなどのロックン・ロール・アーティストたちは、エレクトリック・ギターをフューチャーした演奏スタイルで一世を風靡したが、このことによってエレクトリック・ギターの存在は一般的に知られるようになり、またエレクトリック・ギター・メーカーとしてのギブソンの知名度も飛躍的に向上することになった。

そして、これ以降、ロックン・ロール・ミュージックの出現からめんどと現在に流れるロック・ミュージックの歴史の中で、エレクトリック・ギターは常にそのサウンドの主演の座を保持し続けている。

しかし、ここで注目したいのは、ギブソンのエレクトリック・ギターが常にそのテクニクや演奏スタイルをリードする存在であったということだ。

ハムバッキング・ピックアップは、デイスティーション・サウンドやウーマン・トーンを生み出し、SGギターは、ギターを投げる。ふり回すといったアクロバチックなステージ・アクションを実現させ、セミアコースティック・ギターは、

ロックとジャズのサウンドを合体させたフュージョン・ミュージックを生み出し、ゴールドやサンバースト、レッドやブルーといった派手なフィニッシュ・カラーやユニークな変形ボディは、ロックのファッション化と切っても切れない関係にあったと言える。

しかも、いかにミュージシャンのテクニクや演奏スタイルが、その楽器のキヤパシティや特性に密接な関係があるといっても、ロックのミュージシャンたちがそのキャラクターを活用する何年も以前に、そのような製品プロデュースしていたギブソンの先進性には、驚きがあるものである。

POST-MODERN

こうして、ロック・ミュージックの発展と共によりビジュアルになり、より完成度を高めていったエレクトリック・ギターの開発は、ある時期から乱然期の様相を呈し、古き良き伝統も楽器としてのロマンもあまり感じられない方向性に向かって行ったと言える。



より合理的にムダを排し単純化して、その曲、そのコンセプトだけに通用するようにデフォルメされたギターには、楽器としてのニュアンスをあまり感じることができないからである。楽器(インストゥルメント)というよりもむしろ演奏する道具(ツール)といった意味合いの大きいギターでは、それぞれの楽器としてのアイデンティティも、伝統が年々と受けつがれていく難読性も、ミュージシャンと共にサウンドやテクニクを向上させていくという愛着心も感じられなくなってしまったろう。

しかし、このような極限を超えた合理性(モダニズム)に対するフィードバックは、徐々に起こりつつある。

1987年、心機一転したギブソンにおいても、古くから培われたクラフトマンシップとその経緯にうらやまれた性かな楽器作りの伝統をより強力に打ち出して、ミュージシャンとのスキャンダルによるクリエイティブな活動を行なっていく方針が伝えられている。

他のエレクトリック・ギター・メーカーには類を見ない約100年の伝統と、常に先鋭を走ってきた技術開発の気風が、今後どのようなギターを作り出していくのかは不明であるが、ギブソンは合理性と伝統美が美しいハーモニーを作るポストモダンの時代へと、確かな足跡を刻み入れたように。

やはり、ギブソンはギブソンなのである。

1987 Gibson Catalog
Produced by Yamano Music
Design Works: Japan Music Trades
Art Director: Tadamiya Sugawara
Photographers: Yasuo Nakajima, Studio Sharp
Ikuo Okuma
Special Thanks to: Takashi Kawamata, Minoru Tanaka, Player Corporation, Ichiro Kita, Music Ad, "With Inn"

Phototype: Foca 50
Photographs: Special courtesy by Gibson Guitar Corp.

YAMANO MUSIC CO., Overseas Division
GIBSON GUITAR Corp., Nashville U.S.A.
All rights Reserved.

写真の色と実際の色が違う場合があります。仕様は最新目録のため異なる場合があります。あらかじめご了承ください。
© 読者誌掲載
© 1987/10・10000

